

## リレーコラム 44

### キャリアの積み方—私の場合

医療法人社団昌仁醫修会

瀬川記念小児神経学クリニック

## 事件は「現場」で起きています

野崎 真紀

私は医学部を卒業後、母校の附属第二病院にて研修し、小児科専門医となった。

医師になって二十数年たつが、この間4人の子どもを育てる中で何度も仕事を中断し、時には専業主婦生活もしていた。それには、ここに書ききれないほどの経緯と理由とがある。

一番の要因は、30代前半に泌尿器科医である夫の転勤やアメリカ留学といった、東京を離れるイベントが続いたことだった。「ご主人に振り回されてお気の毒に」とおっしゃる方も多いが、実はアメリカでは育児休暇を満喫していた。留学前、私はすでに育児と仕事の両立に疲れ切っており、新天地での生活を夢に描きながら渡米したのである。アメリカの子育て事情は驚くことが多く、今となっては得難い経験となった。

帰国し東京に落ち着いてからは、再び常勤医として働くという選択もできた。しかし今度は協力者の問題があった。泌尿器科医の仕事はあまりにも忙しく、夫をあてにすることはできない。これまで協力してくれた母や姑も、年とともに戦力として期待し続けられなくなった。自分一人で、子どもたちの急な病気にも即対応できる状態で働かなければならず、おのずと仕事は制限されていた。いや、それは言い訳か。子どもたちの生活を何よりも優先したいという思いが強かったから、というのが本音かもしれない。結局私の仕事は、週に数コマ非常勤で働くスタイルに落ち着いた。

40代になっても、相当な時間を家事と子育てとに費やしていた。世話に手がかかる時期は脱したものの、中学受験指導が日課に加わり、自分のキャリアを考え直すゆとりはなかった。しかし一方で「神経発達症について勉強したい」という漠然とした思いが膨らみ続けていた。幼稚園や小学校へ出入りしていると、否が応でも神経発達症の子が目に入る。騒がしいくらいは序の口で、かんしゃくのせいで授業が中断したり、暴言暴力で同級生とトラブルになったり、騒動は日常茶飯事だった。そんな「現場」に対して親の理解が得られず、状況が改善しないことも多かった。業を煮やした保護者たちが校長室へ詰めかけたら最後、親も子どもも先生も、信頼関係はなくなり陰口がささやかれ、クラスは崩壊の一途をたどる。そこまでくると、他の子どもたちの情緒もかなり乱れてくる。

何か打開する方法がないかと成書を探したが、参考になる本は見つけれなかった。神経発達症について勉強できる施設を探したりもしたが、研修医の募集ばかりで、私には時間的にも経済的にも勤務は無理だった。発達を診ている医師たちはこういう「現場」を知っているのだろうか？神経発達症の子だけでなく、その周りにいるたくさんのおともたちの苦悩を知っているのだろうか？悶々と考える日が続いた。もはや諦めていたある日、日本医師会女性医師バンクからの1本の電話で、突然扉が開かれた。勤務の希望はないかと聞かれ、「神経発達症について勉強したいのですが、短時間勤務ができて、給料も少しはもらえるところなんて、ないですよ」と、ダメもとで答えた。そして数日後、紹介されたのが瀬川記念小児神経学クリニックである。とりあえず面接に行くよう言われたが、HPを見れば見るほど神経学クリニックとしての専門性の高さに恐れ入ってしまい、お断りするつもりでお茶の水へ向かった。しかし星野恭子理事長は笑顔で一言、「何とかなるわよ。大丈夫！」そこから新しい人生が始まったのである。

クリニックにいらっしゃるのは林雅晴先生、木村一恵先生、福水道郎先生、長尾ゆり先生など、瀬川病を発見された故瀬川昌也先生の直弟子であり、非常勤の先生方も含め小児神経学の重鎮ばかりだ。そこへ迷い込んだ海の物とも山の物ともつかない私に、先生方は丁寧にご指導下さり、スタッフの方々も本当に温かく見守って下さった。結局、神経発達症にとどまらず、てんかん、睡眠障害、ジストニア、トゥレット症など、神経学について広く学んでいる。その奥深さゆえに「20年前にこの道に進んでいれば…」と思わないこともなかった。だが、これまでの人生があったからこそ今ここにいるのだと思い直し、前を向いて歩いている。そして、故瀬川先生の教えをいつか孫育てで実践してみたい、と今は夢見ている。

## 著者略歴； 野崎 真紀（のざき まき）

- 1997年 東京女子医科大学卒業、同大学附属第二病院（現・足立医療センター）小児科入局
- 2005年 夫の留学でアメリカへ。休暇可能期間を超過し、退局となる
- 2007年 都内の病院・クリニックで非常勤医師として外来診療、その他足立・荒川・中野区にて乳幼児健診業務に従事
- 2018年～ 瀬川記念小児神経学クリニックにて勤務、現在に至る

4人のおともたちは、現在大学3年生と1年生、高校2年生、中学1年生  
PTA 委員歴は数え切れず（学級委員、校外活動委員2期、推薦委員、卒業対策委員、副会長3期、会計監査2期）。現在も地域のビーチバレーボールチームで活動

～ ダイバーシティ・キャリア形成委員会より ～

## 「リスキリング (re-skilling) とアップスキリング (up-skilling) 」

リスキリングとアップスキリング、最近よく耳にするようになった言葉です。どちらもスキルを身につけることですが、アップスキリングは既に持っているスキルをさらに磨くこと、一方のリスキリングは新しいスキルを身につけることです。小児科専門医の目指すのは子どもの総合医なので、この言葉を私たち小児科医に完全に当てはめるのはむずかしいのですが、アップスキリングは、例えば担当した症例から興味を持ち、その分野でさらに研鑽を積むような場合でしょうし、リスキリングは、例えば留学を契機にそれまでの研究分野とは異なる新しい分野に出会い、その分野に進むような場合でしょう。言うまでもないことですが、医師は現役である限り、生涯にわたって学び続ける必要があります。科学技術の進歩により情報量は加速度的に増加しており、学び続けることの重要性はますます高まっています。しかしながら、学生の頃あるいは研修を開始した頃に思い描いた一つの方向性に囚われすぎると、かえって袋小路に入り込むこともあるかもしれません。継続はもちろん大事ですが、その時々状況によっては柔軟に対応することで、想定外の道が開けることもあるように思います。本コラムでも（そしてこれまでの多くのコラムでも）筆者がその時その時の状況に応じて柔軟にリスキリング・アップスキリングしてキャリアを形成していく様子が記されています。このコラムのみならず、ダイバーシティ・キャリア形成委員会では日本小児科学会学術集会での企画シンポジウムやカフェ企画など、多様な考えを知り、自由に意見交換する場を創ってきました。キャリア形成の機会平等を目指して、新しい企画も進行中です。リスキリング・アップスキリングしたい方を常にサポートする学会でありたいと思います。お悩みがあればぜひ身近な方や当委員会にご相談ください。そして、勇気を持って新しい一歩を踏み出してください。

\* 2023年7月に男女共同参画推進委員会は「ダイバーシティ・キャリア形成委員会」に名称を変更しました。